志野のもと

宇治巻　二

哥を名ごせつる

[v. 46]

PL 788
.4
.G4
1654
vol. 46
Copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

51

是ヨリ匂ノ巻ヨリ廿二年ノ春マデ有
二月の廿日の程に。兵部卿の宮(匂)はつせにまうで給。
ふるき御願(ぐわん)なりけれど。おぼしもたゝで年ごろに
なりにけるを。宇治のわたりの御中やどりのゆかし
さに。おほくはもよほされ給へるなるべし。うら
めしといふ人もありける里の名の。なべてむつ
ましうおぼさるゝゆゑもはかなしや。上達部(かんだちめ)いと
あまたつかうまつり給。殿上人などはさらにも
いはず。世にのこる人すくなうつかうまつれり。六条院(源)
よりつたはりて。右の大殿(夕霧)しり給所は。川よりをちに
いとひろくおもしろくてあるに。御儲(まうけ)せさせ給へり。(今ノ平等院ヘ)
おとゞ(夕)も帰さの御むかへ(匂ノ)にまいり給べくおぼし

たる代、係なる物忌のせもくつゝしまゝのべく申さ
なれば、えまゐらぬよしのうしこまり申なり。実なる後
すき後じとおぼしたるに、宰相の中将、今日の御
せうへに来りあひなへるに、中こころやすくて、
かれはたりのかしきもつゝへようんと御心ゆき思、
おさゞをばうちとけてこしまくことくしき
もれに思ひさゝしなり。御子の公達、右大弁、侍従の
宰相、権中将、頭の将、蔵人の兵衛のとけるど、これ
さつゝひ給、みかど者もころことに思ひしなへる。実
なれば大かたの御覚しもいと限なく、よいて六条院の
御かたざ後はうさぐの人もこれはたくしの恵に

こころよせつゝうまつり給。所ゝりつけたる御志何
らひなどおかしう志れ志て。ごすぐろくさぎれげん
どもなどさり出て。こころぐにもさひくらし給つ。
宴(白)いるらひ給ふぬ御ありさまなるやましくおぼさ
れて。こゝにやすらちむの御こころもふかれがうち
やすきなて。夕つるこぞ御琴などめしてあそび
給。れいのかう世ばなれたるところも。水の音もく
てもやして。もれて音すきまさりこちして。
坡(うの)ひぢりの宴(八文)にもさゞさしけるほどなれば。とひ
風に吹くるひぐさ伏雪給に。笙(八ん)うしのことおぼし
いでられて。笛(討ふえ)をいとおかしくもふきとかしたるか

されされなるん。堀河の六条院の御笛の音聞えは、いと
おもしろかりけるあいだ、つねにまゐりて吹給しが、これも
すこしのぼりてごとくちさけのそひけるは、ちごのれ
とものれぞうの笛の音まもてまゐりけるなど、後ち
おくれ、哀にひさしくなりにけるや、やうやうあそび
なども中で、昔よりもあはれにけるさし月の。
さすがにおほくさぞくらうしもてなひなりけれども、の給
つひでにも姫君たちの御方へ、おもしろくうち出給
ところにひとひき、あそびは、やまずものくるしく遊ばして
けり。宰相のこゝの御ぞうちちさゆうりうまゐて
まほしけるとざしもせよろまじくあらずまつそ

やうの心あきらん人とばいかでかなどおぼしこゞれ
かれぐとちがめ給ところは其の事もいとあしがる
こゝはこゝろやすかへる接口のやどりは忍ひのまぎれ
まいとさう明ぬるこゝちして。あらずかへらんこと
と宮はおぼしてとかぐとかすこゝにつゝれるそらに。敬
様あれば今ひらけそむるなど。宮こゝ見つゝさるゝに。
河そひ柳のおさしつゝしるびく水かげなど。そろか
ならずおかしこゝは。こゝろしひかるゝぬ人も。いとめづら
しくこゝ接がたしとおぼさる。宰相もかゝるこゝりを
すぐさずかれ宮にまうでゞやとおぼさど。おまへの
人めはらざて。ひさり漕出給ふん舟にうりの程もかゝる

らうまやとさひやすしひ給行まれ八ありけれ心あり

山風ま霞（かすみ）ゆさせくと急はあれど備（つぐて）てゆう

をちのしら波ざうまいとおかしうかさあへり。白心やこ

おぼをかたりとこゝろまへじいとおかしくおぼひて。

これ（討）けりへりは我きんとて

遠（白をちこち）をの汀（こゝぎハ）の波はへぶ川先なる波吹かよへ宇治

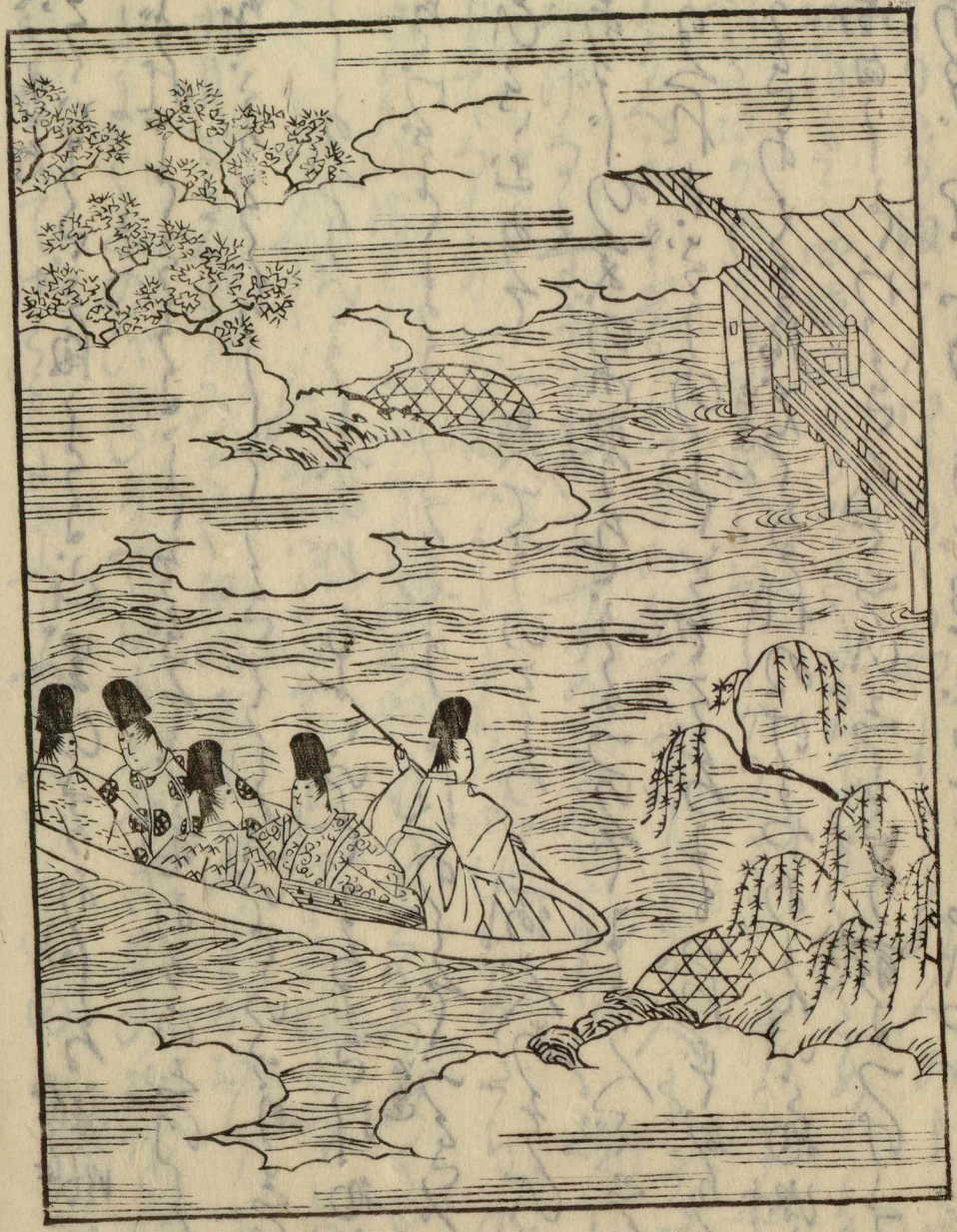
の河風。中（芸）ねはまうで給。おそびまころいれたるさん

ぶらさそひて。さしやつま給行。かんすいらくあそび

て。水まのぞこゝろらうまつくりおろしたる橋（くし）の心

ぢへなど。さうかるまいとおかしう故（ゆへ）あり。宮（八）なれば。

人ぞ心して丹よりおり給



ちかいまゝに海ちかき山里びたるおどろ屏風な
どれどもさかさまにそゞろ、家ありれもありしひ
そゞろにうちしてうきとしひびといひうきしれ
しのへりびよしへのねるゞびとまるさ引抱だ
そばざしまうけろやうまはあそで公達うさく
ひき出ぬて一越でうのころは檜人あそび給ふ
おりじの家のれ琴をうちつのでまとんぐとひ
のへれどもかりのことぞこゝろまもいれどもおりく
うきあるを給ひて公達んあるれめけりやあはん、いとも深く
面白しとうけきんぐせひきこゝう家まつけろ
おりじひとおうしうきぬてゞうそまさひやうし程

よりはる雨そんけうめくいやしからぬ人あまた
おほさこゝ四位のかうめさうなどかくひとめこゝか
べさおりとかゝていとおしがりこさてけうまや
さるべきかゝざりまりあひてへいじとる人もこさる
なげなしずさるゝまかうめさてよしくしう
もてなしあつり雨(若人達へ)らうとこちはれむとめこちの
すまひ給ふんれけりさ雨さやまつてこゝろ行くを
人もあるべしかれ宮(白ん)はまいてかやすさほどなるぬ
れ身をさへざころさくおぼさるゝ候かゝるおりま
ぶまとしのびかゝめておもしろさ菊の枝をお
らせ給てれともまさしふかへりしものおりしさ

してそてまつり給

句 山ざくらはよそにあくがるゝ花さそておもひぐさ

しとおりてげる哉 地 花をむつましこゝろやありけん

八ン れくろはらでうはるかに見てまくらしおばしまげ

らふろうおりのことげぢやげにまことにあはし

ほどれかるもげにまくさことにまかんしゆしかど

ゆゑづとも見ゆれば花の色まてうくをなり給

八 うぢしおろ花のさかりに山かげのうきを

るゐ無のさび人ずば花てしまひとおりしげに

らうしきくさのみつげに 地 川風もこゝろぞ人の

さ夜に咲かのこもみてきどもおもしろくあそび給

さ夜に吹かよふ。もれて音どもおもしろくおそひ給

れ(白ノ)むかへに藤(とう)大納言(和柳右大臣之)おほせごとにて来ぬなり。人ぐ
あまたゝ来りつどひ。もれさいかしくてきおひかへり
給。けうき人ぐあるぞかへりこのこせられける。宴(白ん)をまた
さるべきついでしてとおぼして。菜盗(地ざかり)にて四寸の鼎も
ちがめやるほどのこゝあるまゝからのもやまとのを
奇どもおほかれどうるさくてこゝろもきらぬなり。
もれ(白ん)さはがしくて。せふまくにもえいひやらずなり
ましをあるぞ宴(白)はおぼして。しるべなくてもれ文を
つねにありける。宴(八詞)もなほこえ(姫宮に)ぬへ。けぎとけきう
ごちてをもてなさじ。中こころとときめきにも
ぬべし。いとすきのへるみ(白)こなれば。うろ人など

きく給が粮(白)もあらぬすきひなめりと八ぞぐのうし給
時ぐ中の君ぞ笑ひ給姫(大君)君はかやうのこと、こはふれ
まも、もてそなれぬへるれこころふさなり、いけと
なく心ぼそきれなりさ夜ま、雲のつれづくをいとゞ
くらしがたくなるが給、ひまきり給れさ夜かたり
どもいよく夜さりあらまほしくおかしきも、中(八ん)こ
ころぐるしうかたほまもおもをましかば、あらら
しくおしきかたのしいうすくやあらましなど、
明暮おぼしこぶるおほこぎこ女又中の君女三まぞ
成給けり、宮(八)はをもくけしこぬべきとしなりけり、
物(八ん)心ぼそくおぼして、れをてなひつねよりもこゆこ

なくしき給世にこころとゞめ給ひ〇が出こちいそぎ給
のこゝおぼせば涼しき道にもをもむきぬめべき給
こゞこれは（姫宮達ノ事）ことゞもまいとくおしく、かぎりなきは心
づよさなれど必今（ならず）いとこすて（姫宮を）給いんはこころも
こゞれなんと、こなり人もなしたりこそゆる給
おぼすき後にはあらずとも、なれめまさても人こそ
くちおしりまじう、こゆるされぬべきてものひと
のまごころにうしろこゆるんなど、しひよりこそゆる
あらば、しらずがおまてゆるしてん、一（姫宮）所世に住つき
給よすがあらば、それをこゆづりなにはなぐさめ（をく）並
べきを、さまでかきこころに（こゝ）弱きゆる人もなし。

まれくいろうるさしたりまずすきごとしたるど
すゝ人は文ワかくしき人のころのすきひまもれ
まうでの中やぞり往来(ゆきく)のほどのちをざりごとは
そしきばこかけてさすがまうくるがめ給有様など
としたりあるづらたしげまもてなすもめぎ海
しうてなげのいらへをぞまをさせ給ひず三句文ぞ
ろ給ふでいやまじとおぼしてれころふかりけるに
さりべきまやおりしけん宰相(さいしやう)の中将(葉)其秋(そのあき)中納言は
なりなめいとゞ白ひまきり給也(葉ん)のいとなるこまそへ
てもおぼしことおぼかりいかるることくいぶせく
ちひけたりし年ごろよりも心ぐるしうて(拘束)すぎ

給まけんいましへざ海の思やるくまにけしうろく
なり給ぢりとてなひもを海ほしくなん。彼老人を
い衰なるゆれまにとさて。いちぢるさ海なるしず。
とうくまぶらりしつて心よをとふらひ給。宇治ま
まうでくひさしう成まける紙に出て京のへり。七月
ぢりまなりまなり。都まはまぶいりこくぬあさの
宇色を。青羽の山をくほの青もいとひやくうま。樒乃
山べもけづる文付て。猶こづねきこうまおかしう
めづらしうおぼゆる紙。宮ハまいて。れいよりもまち
よろこび笑しのて。此度ハ心ぼそげなる物ぞいと
おほくト給。なりうん物。これ君ぶちをさるべき物乃

こゝろにもとゝひ思すてぬ事れにかずまへ、のへ
なぐおもむけつゝきてしのへだ。一こと（蓋詞）にてもうけ
こゝろをきてしかば、さらにおふのへをこゝろまじく
なん。世中に心をとゞめじとちぶき侍る男にて、何
ごともこれもしげるきおひさきのすくなきになん
侍れど、さるゝにてもめぐらひ侍らんかぎりはか
くらぬ心ざしを申らんしじ思らきんとなすん。思ふ
かゝるなどきてしのへば、うれ（八ん）しとおぼひこゝろも、東
ゐるき月のあきらかにさし出て山のはちかき
こゝちするに、わんぜいとあれに志にて、若も此
ごとりし給（八詞）此の世はいかゞ成まくらん。くづし（九重）

なぞまてかやうなる秋の月は此前の此あそび乃
おりはさふらひあひたる事は物のどまずとおぼしき
恨（うぎり）どりぐはうちあはせたるひやうしなどことく
ことしきよりもよし有とおぼしある如此更衣乃
此つぼ口つぼ口のぞのがぞくいいどましく思うたべ
の情（なさけ）をかたすべかめる紙衣ふるき程の人のけし
めりぬるがこころやましくかいしらべほのかはこ
ろび出たるもれて者なぞさくどころあるがおほ
かりしかれなるにとまも如ハまてあそびのつまま
しけべく抱たるまき抱かゝ人のこころをうごかす
くさたひはなん有べきされバつゝのふるきまや

あらん。子の君のやうに思やるまも。そのこはいと思ひ
おやのころ後こぶさずやあらん。女はかぎりありて。
いふかひなきかたにおもひすべきまも。程いとこ
ろぐるしかるべきるぞ。大方のことにつけての給へる。
いかぐさおぼ(ハ)けぐらんと心ぐるしく思やらるゝ此心
のうちなり。すべて(蓋詞)何ことにまたおもひ給へまて
ふるけまや給らん。三げからのことにてはいかにも
いかにもふるうに思ふるの給らぬ後げにとしか
なきことなれど。こゝ思ひめづるころこそそむきがる
きことに給りそれ。さうしうひぎりぐろ。かきうもされ
ぐやうちてまひ給りけんなど。四てておかず一こゝ思

きくしれことの日をぞちまゆりしがりこまへだ
八公
うとくしらぬたじめまもとやおぼしらんれ
ぞげうあるこまへぬてぞちまそぐのしきこそ
姫宏
給さうのことをぞいと母のうまうさるしてやこ
八詞
給ぬるいとぐ人のけるひもこしてあれるるゑ志
字色家のき夜まつぎとなるされあそびの心まへて
姫宏達ノ
おしうおぼゆれどうちとけてもいかでかはひさ
あるを給えんをのげうらかぐらりなるしをめ川る
琴を
給りはよぐもれふぐちまゆづりきこしてんとてこや
も佛のれ前まへぬひ思
八
我なくて草のいほりはあれぬ共これ一ことは

かれじとぞせふかう對面(こいめん)もけ度(たび)やかぎりあるらんと
地心ばそきゝ悲びかゝてかくしさひがとおほ
くもなりぬかかれとて。うちなきさ給。(芸)まらうと
(芸)いかるらん世よかかれきんるがさよれちぎり
むすべるくさのいほりハすまひ(訶相撲)るど。おほやけごと
どもまぎれ給ふころなて。ゆくんるど。四丸給ふるこ
よてかれとてず鏡(がうり)のふるべめし出て。おりおほかな
地鏡などをさせ給。へがこの身はくゝあるくさし
へて。すきかげを面めしさよ。君ぞちもおくまり
ておりす。(芸)世のつねのけさうびてゆあらず。こゝろふかう
地鏡のどやかよきこしつまれしとまへだし。(大)さう

べきれいらへなどきこえしなふ。三宮いとゆかしう
おぼいたるもれをと心のうちにはせ出けく。けがうろ
ちがらぬ代人にはことなりかし。さばかりれうろ
もてゆるひ給ことのさしもいそがれぬよ。かてたか
れて。たゞ。あるまじきことくそさすがに覚えず。
かやうにてもれをも罪しかたし。おりふしのそれ
もみぢにつけて。哀をもちさけをもかよそすかり。
まくらぶもれし給あたりなれば。すくせことにて。
ほかぶ夜にもなり給ひんはさすがにくちおしうる
べく。つきやうじたるこゝちしそれも。まぶ夜
ふるさ程にうりなぬ心ばそくなりなげにおぼい

ありしはそしき後、せむきてし給ひしさはがしき
程をしてまうでんと覚え、白 昔の家もはあきの
ほどよ、紅葉こよおりしまさんと、さるべきつゐでを
おぼしめぐらす、はふこはこうずなり給、中宮 なんなるも
まめやかよおぼすらんともせひ給ふねど、わづら
そしくもあらで、ちうるきさ夜よもてなしけ、
おりくよ罪しうちし給、おきふくぬりまくり、
八ん 家はいこじう抱心ぼそくおぼし給ふれば、例の 志づう 靜なる
所にて、念佛をもまぎれなくせんとおぼして、君遅
まうこさるべきことこそ給、八詞 世のことくして、つねの
見れをのがれぬけざなるれど、せるぐさむかく

ありてこそ。かるしさ浅もさ海をもれなめれ。又こゝゆ
づる人もなく心ぼそげなるれ省程どもなく。うちもて
てんがいろじさと。されどもさばかりのことなり
さ海さげられて。ながき世のやこまさへまどそん
がやくなさ浅。かけこなる程ごまさひすけるせ浅。さり
なんうしろのことしるべきことはあらねど。我身
ひとつはあらず。道給ましれおもてふせまかなぐ
しさ心どもつるひのふか。おぼろけのよすがなしで。
人のことはうちなびきこれ山里をあくがれのか。
こゞかう人はこがひこゝろ契ことなる身と思しなして。
こゝはよをけらしてんとしとりのへびこふるはしひ

しるせばとまもおよずるある年月ばかりまで
なかさるすまことありていちずくいとおしげ
なるよそのまどゐ浅ましがるんなんよろべきるど
ののふ（姫宮蓮仏）どもらくも身のうゑむやうまでハおぼしめ
なずされぞいうしてうされなりて付よる
うき時（とき）もなずかふべきとおぼそよろくころばそき
さ夜のれおましがまいうつてなきされ心まずひ
ぢとよあん（地）ところのうちまことさ寺て語つしめど
明暮れうきちくまなるしきいのてはけよ別語
りんハつくさ心あらんねど（八ノ出ヅラウ）げようしうゑうるべき
此百語よるん百げるおきいう語さんとての日え

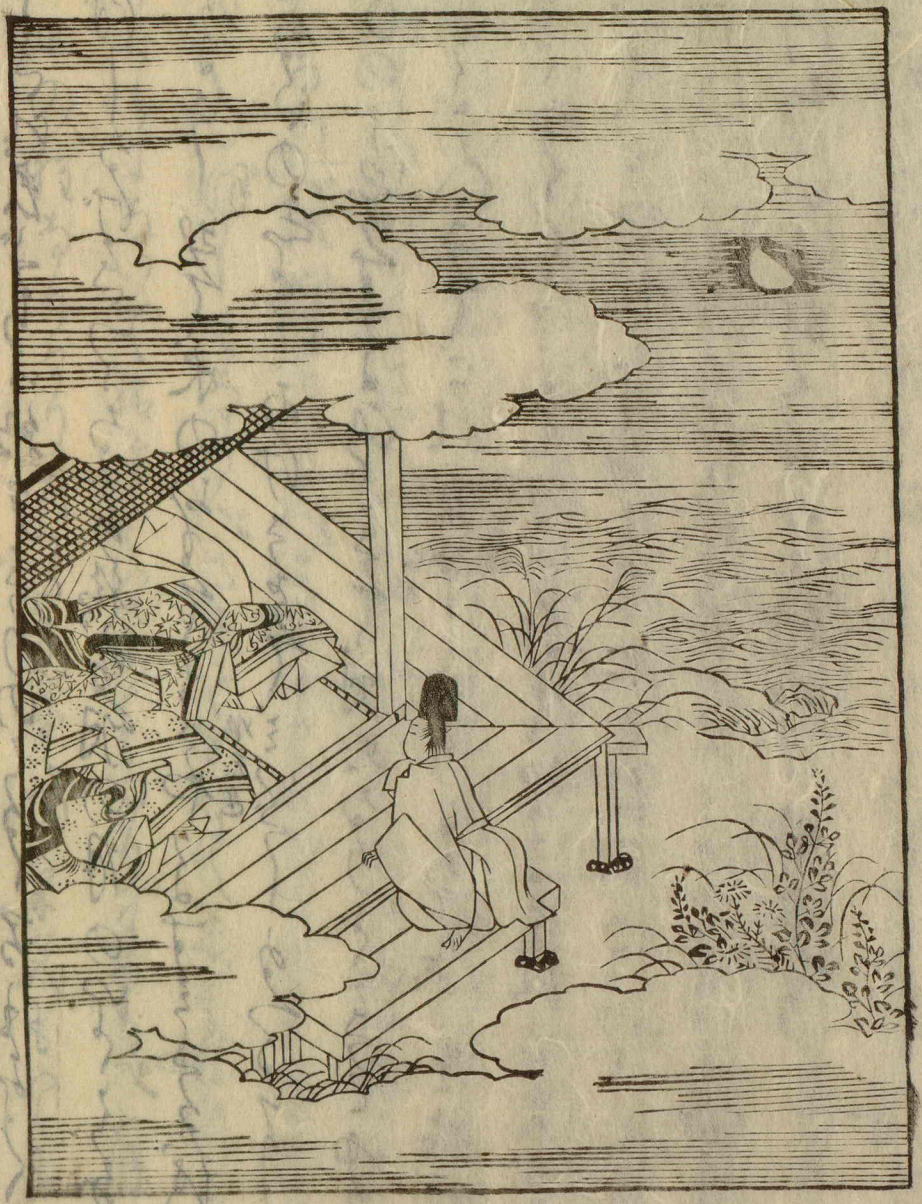
れいるしずこるとうるとこゝずきありきぬてこ給
いとものれたるくうりそめれやどりまて。すぐひ給け
なれすまねの有信をなりたん後いかましてかハ。け
うさ人のこゝへこもりてはすぐひ給かんと。たまこぐ
ぐこつゝ。ねんずし給さ海いとさきよげなり。おとなび
しろ人ぐめし出て。八詞 うしろやすくつうまつれ。
なまごと。もまとよりうやすく。よまきてあつまど
きゝハの人ハ東のおとろへもつねのことまてまぎ
れぬべかめり。うつきハまちりぬれど。人も何と
ぬハざらめどくちおしうて。さすしへん笑ううじけ
なくいとおしきことなんおほうるべき。抱さびしく

こころぼそきよ波ふるはれいのことなり。むまれしう
家のほど。をきてのまくまもてなしたるんなん。さて
こくまもけが心ちまも。おやまちなくはおぼゆべき。
まぐさもくしく人うずめんとなまふとも。それこそ
ろまもうるふまじきまとなるしバ。ゆゑんくうろぐ
志くようしぬうたまもてなしこそしもなおまど乃
給。まぐ曉ま出給とても。こゝろまつくりなて。なう
らんほどこころぼそくなおぼしまびそ。心ぞうりも
やかまておそびなどは志まへなまごともしまえうるふ
まじきまとなおぼしいれそなど。くりえがちまて
出なぬ。ふたところいとゞこころぼそく。抱なれいけ
姫宍達ん
られて。おさふしけうらいし

られて、おきふしけうこひけく、ひとりぐ
ましうばいうでうあしろさまし、いまも来もさぐめ
なきよまて、もしけるくやうもあらばなど、なきこ
けひこ、こちふれどとも悔めとも、おなじころは
なぐさめかたして、ゑし給、かれ(ハ)をこなひ給、三味(まい)、かふ
たてぬらんといけしうとく待四人給、夕嘗ま、人(八ち)
まいりて、けさよりなやましうてなん、え来しぬ、風か
とてとうくつくろふともれすう程まなん、さるは
例よりもこいめんころもとなきをと四人なへり、
(姫宮達)むすつぶれていうなりようとおぼしなげき、御ぞ
どもけこあけくて、いそぎさきせなてなれなどし給、

八
二三日はあり給はず。いかまくと人なりたまへど。
八詞
ことはおどろくしくはあらず。そこそこなく
なるしうなん。すこしもよろしうならば。いまもん
ぜてなと。云葉にてきこえ給。おぼりつとさふらひて
つうまつりたり。あさう詞
ぞうなきはなやことこゆれど。
ぎり
限のたびにもおはしますらん。君道のはるゝ。なまら
おぼしなげくべき。人はこれはすくせといふ事
ことなれば。はゞ心よりうべきにもおはしまさずと。
いよくおぼしたるべきことを思ひしらせ給。
今さらにないで給そといきあはりなりけるに。八月
地
廿日の程なりけり。大かたの宮の家女もいとゞ

しき此。君ぐちは朝夕ぎりのもとに居もすく。
おぼしなげきつゝなぐめ給。有明の月のいとちな
やかなさし出て。水のおもてもさやかなすゑ。
そなたの志をとゝあげさせて。三いぐしのみるなり。
ゆかりのこゝろすゝまひぐきて。明ぬなりとさとゆ
ほどる人きて。これ夜中ぐりまるん。うを給ぬ
なとなくくやせ。心なかけていかなとはこえぞ
志をしのみれど。うちきて給ふは。あさましく物
おぼしぬこゝちして。いとゞかろことにあるべきも
いづちかいるけん。こゝうけづ所のみなり



姫宍遊人
いとじきこともこうめれまへまて。おぼつかなうら
ぬこそつゆのことなれ。おぼつかなさそひて。お
ぼしなげくることたりなり。しばしまてもお
くれたてまつりて。世にあるべきもれとおぼしなら
ちぬれ心ちどもまて。いかでかはとくれじとなさ
しづこしまへど。恨あるほなりかれば。なまのかひ
なし。ねぎり年代ちぎりをき給けるまくに。のち乃
れことをよろづにつかうまつる。姫宍遊人なさ人になりぬへ
らん。八れさ海かたちをぞに。今一度こなたんとおぼし
のゝへど。今さらにあるべきさ。あさり汀
日代も又あひこ給まじきことを。四人しらをつれば。

いまはましてかたこゝはれ心とゞめ給まじきはこゝろ
づひをなしひのべきなりとのこ罪ゆ（姫宗達ん）おりしまし
けるれ有猶を罪のふよもおぎりのあまりさらしき
ひぎりぎろをよくつくしとなんおぼしけるか
八入（八）のれほいえ書よりふくおはをしらぎ（姫を）かう
こゆづる人なきれことぜのこすてがこきを（八）いけるか
かぎりハ明嘗えさらずこまりを世ま心ぼそきよれ
なぐさめよもおぼしくなれがこくてすぐひのへる
をかぎりあるほまえぶち給も（姫ノ）志こひ給れ心もかれ
ちぬけぎなりなり（慧ん）中納て殿まいきくのていとおへ
なくにかしく今一度こゝろのどうまてきこゆへ

なくにかしく今一夜ころのとかまてなさせん

かりけることおほうおりうろうちして。おほうた
世の有さ海せつぶけられて。いえじうない給。まうた
あひこんことくたくやなどの給しを。れつ子乃れ
心まも。朝夕のへぶてしらぬ世のさうなさ。ひと
よりけるおもふおもへりしうばこくなれて。さのふ
と日とせんざりけるに。夜くすうずうなしくおほ
さう。あぶりのもとまも。君ぶちのれとふしひもこ海
やうまさてし給。うろれとふしひなど。まくて着づれ
ちてもう人ぶまなきれ有さ海なれば。拙おほし思
れ心ちぞまも。年ごろのれ心ぶ人の哀なめりし
などをもせしり給。よれつねのほどの別ぶまさし

あたりてハ又こゞひなきやうにのこ見る人のせひ
まどふ抱なめる後なぐさむかたなげなるれ男ども
まて いかやうなる心ちどもしぬふらんとおぼし
やすらへ後のれひぎたまぐあるべきことゞもなし
たりておぎりにもとふらひ給ふにもおひ人ども
まことよきて れず程なぐのことも せひやすらへ
給ふ おけぬ 姫宮遊ん 東の心ちながら九月にも成ぬ 望山の
そしきまして袖の時雨をもよほしがちにとも
まれがあらそひおけるまの葉の音も水のひゞきも
泪の瀧もひとつ抱のやうにくれまどひて かうでは
いとゞかぎりあらんは命もしぞしめぐらひ給

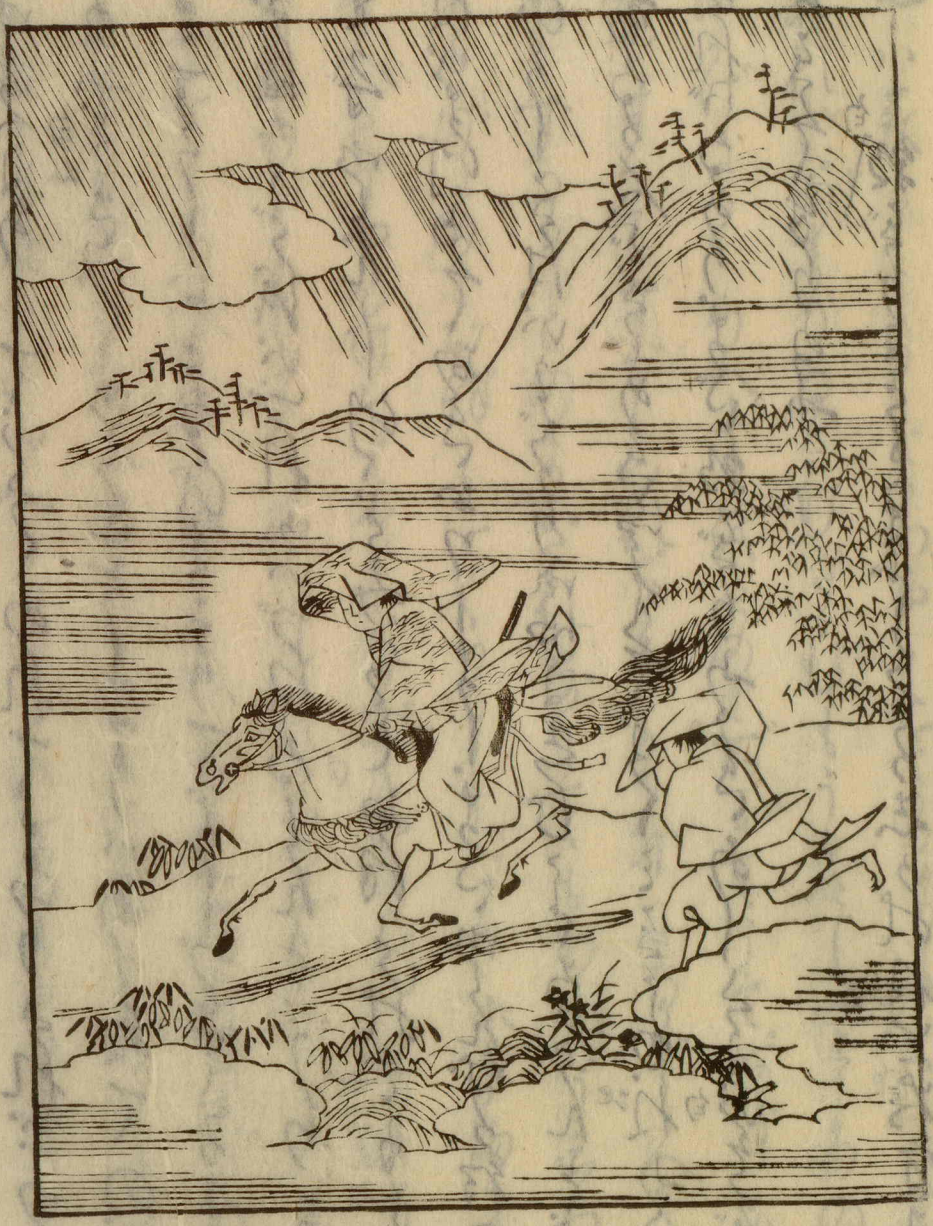
ちんと。さゝふんぐいろろばそく。いとゞしくちぐ
さめきてしけるおもひまどふ。こくまも（八ノ所を云ヘ）念佛のそう
さゝひて。おかしまきくさいはとけをうてゝる
ゝなりつゝ。時ぐ来りつゝうまつりし人ぐの。れいと
まことりさろうぐりはおもれまをさるひて通す。
（旬）芸ゐ家よりもさびくとふらひ罪し給。さやうの（姫宗達）
れうつりるぐ罪しん心ちもしき給ちば。おぼ法かか
なれば。中納（白ん）（芸くす）をはかうもあらざるる後。我をべる後
志ちるちあつるもあるとうらめしくおぼして。紅葉
のさりまふゝちるぐつくせ給ちんとて。いでさち
給しをかくしけるりのれをうえうびんちるさころ

なれば・おぼしとまりて口おしくなん・れいみも
そてぬ・限あれば泪もひまもやと・おぼしやりて・いと
おほくうきつゞけまへり・時毎がちなる夕つゝ
白 としかなく秋の山里いかならんこ萩が露乃
うら夕蓋・こゞ今の兎の気色を・おぼし（夕詞）しらぬ
がゆるしんも・おまり心づきなくこそあるべかれ・
かれりのべもかてながめくらくころはなんなど
有・げ（天詞）はいとおまりせひしらぬやうにて・ひゞくは
なりぬる代・なる代罪しまへるど・中の君を例のそゞ
のしてうせなり給・かふ（中ん）までながらへて・硯など
ちらくひきよをてうるべき物とやはせし・心うくも

通まける日のぐかるとおぼしてまゐるかさんもり
物こゝぬ心ちしぬへが（双と）しやつまて（行）えこそか
き侍るまじかれやうくかうおさゐられなどし
侍るげに限有けるにこそとおぼゆるもうとまし
くて心うくてとらうさげなるさ夜になるさ志得れ
ておかするもいと（大）心ぐるし夕嘗の程よりさける
此つるひよりひまてうし通てぞこそるいかで（使司）かゝり
ふらんと（大司）夜は接ひしてといふをうまへど（使司）ふち
かくりこそ（大心）ふりちあといそげがいとおしうて
我さうしうしづ先給ま見あるひど（中と）こゝつ
ひぬひて

大

洞のこまりかたがれる山里はまがさま床で
もろ声になくろろさかうに東のすこつぎもいど
こどしかれば ひさつくろふ前もなく筆にまゝ
をてとしつゝこていぐし給つれつゝひは木幡山乃
程も夜もよるいとあそろしげなれどさやうの
もれをぢすまじき紙えり出給けんむつりし
げなるさくの人夜をこ夜引とじむろほどもなく
うちとやめてがるとしたる家ひきぬ



白ノ
れまへまめして、いたく（使）ぬれてまつりたれば、ろく
ぬふ、さきぐ（白ん）れらんどしりいあらぬてのい
ますうしおとるびまさりて、よしづきたろうき
ざ夜なまど紙いづれかいづれなるんと、うちを
とぞれらんじけ、とみまもおほとれごもら
ねばまづとておきおりしまし、まるれらんずる程の
ひさしきは、いかぢりれ心まさむことなるんとれ
前なるへどさくめきつまして、よくこそも、ね（地）ふる
かればなあり、まぐ頼ぎりふるきあしたる、いそぎ（白）
おきてなりぬふ
頼（白）ぎりまともまぐくきろ志かれねを大方は

やハ哀ともきくゝもろ声をとるまじくこそと
あれどおまり(ゆん)ちさけごとむもうるさし一(ハノる)こころの
れうげまかくろへたる後このゝ所までこそ何ぞすも
心やすくてすぐしつれこころより外にちがらへて
志をずるることのまぎれ家にてもあらばうしろ
めたげにのゝおぼしをくめりしちきれさ海に
さへきずやつけなんとちべていと所くましう
おそろしうて宮し給ひずこれ宮(旬)ちどをだゝ(姫宮遠山)ろら
りまとしちべてのさ海にもしきこえ給ひずちげ乃
もしつとかいなへるれ筆ゝづひ云の葉をおりしき
さ海にちる海めきなへるれけしひをおまるハうしつと

給ひしぞ。これこそいめでたきなめれとこゝ給るがら。
その（定法を云ひ）ゆへくしくなさけあるうたにことをまぜ
まことんもつきなるき男の有き夜どもなれば。なに
かたぐから山ぶしぶちてゐしてんとおぼせ（菫）中納云
どのくれかゝり汁（ぐり）ハかれ（匂ふ）よりもまめやかなるさ夜に
まこしなへば。これ（宮治より）よりもいとけうとげにはおもふず。
まこしなよひ給ひいとまちてても。男（菫）づからまうで
なへり。東のひさしのくぐりたる方にやつれて（姫宮達）おい
するに。ちらうたちよりなて。ふるべ（弁）めし出たるを。
やこなまどひなへるれあたりに。いとまばゆく匂ひ
たちていりおりしたれば。（姫宮達）ゆくしくらいたうて。れ

いとへなどぞぶまえし給ひるばかやうまはもて
なひ給ひて。君のれころむけにしるがひ罪給ひん
さ夜なしんこそ。罪しうけさ夜ひるかひまべかれ。なよび
氣色ぞこころかるまひをなしひ給ひるばへづてに
罪て給ひば。云の葉もつゞき給ひずとあれば大汀おきまし
ういまでながしへ給ひやうなれど。ふひさ夜さん
かたなき夢にまどされ給ひてなん。心より外には
そらの日かりこし給ひんもいくましうて。そし
ちうもえこじろき給ひぬと罪しのへれば。慧汀ことく
いへぞ限なきれころのふかさになん。月日のかげは
れ心もて。ぞれぐしくもて出させ給ひてこそ。

つこも侍らめ。りうさもなくいぶきうおぼし侍り。
まこおぼさるらんとしぐなきもおきらめきそ
まほしくなんと申ぬへバげ（叩ノ人ニ詞）こそいとこぐひるげ
なめれ有さ海をなぐさめきこえ給れ心がへのおき
かしぬほどなど人ぐ罪しきらす（大心）れ心ちよもさこそ
いへやうく心しげまりてよろげおもひしられ
ぬへバ（地）芳ざ海まてもうまでりけきのべをか入
ぬへるころざしなども忘しりぬべし（大）すうしおぎ
里よりぬへり（荒詞）おほしらんさ海又の給ちぎりしこと
などいとこ海やかなるつしういひてうこそ
（大心）おしきけらひなどいこし給ぬ人（荒）なれはげう

さくすぐろもしくるどいあらねど志しぬ人よりく
声をきかせなりすぐろよされこがれまなこと
ちどもおりつる日ごろをしけぐろもさすがり
ろうしうてつくましかれどほのかよひとことなど
いふへきこそ給ふ後のげよりろげ思ほ是給へる
けちひなれバいと（芸心）衣ときくなり給ぐろき木丁の
すきかげのいと心ぐるしげるるよましておいと
らんさ後ほのうし明ぐれなど志出られて
（芸）笑かちろあさぢをこそても雲深（すこぞめ）にやつるゝ袖を
ちひこそやれどひとりごとのやうにの給へど
（大）色かちろ袖をバ露のやどりにて我方ぞさら

ま亜どころなさ。くつるしいとそと。すゑはいひけら
ていというじく思がたきけれひまて入なぬなりひき（慧ん）
とゞめちゞすべき程まもあらねばあらずあられま
ねばゆおいべ（弁）そこよなきれかくりま出きて。昔今を
りさあつめかるしきれ物語ども罪ゆる。何りがたく
あさましきことゞもをもこうる人なりそれば。かう
あやしうおとろへたる人とも覚し捨られず。いと（慧）
なつしうかたらひ給いけなりし程まこ院（源氏に）ま
とくれなりていうじうかるしこ抱は世なりなりと
ゑしりましけば。人となりけよくひまそへて。
つりに位（ふの）世中の自ひも何ともねばしぞなん。ただ

かうたげやかるかれ住（まま）ねるなどのこころまかなひおもう
しをかくこころくこころしなりけるまいかく
いとじくかりそめれ世をしてしらしこころをもよほ
されまされどこころぐるしうて（唯完遂ノ）さまりおもへるれ
ことごとも（萬ノ）ぼごしるぞ心かたんいかけくしきやう
なれどたがらへてもがれ（ハノの結ひしまつ）れとあやまたずきこえ
うけ給ひしまほしさまなんざるは覚しなきれ（拍ノ事）ふる
物語きくしまりいとぐ世中まなとさんとも
おぼしぞなりまたりやとおなさつのおへば（弁）これ
人いましていとじくなきて元もきこしやらず（弁心）れ
けこひるどのこゞこれ（拍ニまたまゝこと）かとおぼしおまさしげうち

忘たりつゝいまし人のれこと後さへ見るとかきのて、さ
こしやしん方もなくおぼれぬたり、これ人いかれ
大納言のれめれとゞまて、ちくいこれ姫君道のさく
ふ方の母方のあぢ、左中弁にてうせまけるがこなり
なり、さし泥とをさ国まあくがれ、ぐ君もうせぬ
て後、彼とのまはうさくなり、此宮まは弱ぐりてあら
せ給なりなり、人もいとやむごとなりしず、宮仕なれま
されど心ちなりしぬ物に宮も常して、姫君たちの
れうしろこぶ人になるしまへるなりなり、兵りしの
尤ぐいさしぐろりく殺夕にこそてまつりなれ、
ころ備つゝん雨なくしきこゆる君ぐちまも、一こと

うちいで罪ゆるついでなく、遊びこめたりけれど
中納言の君はふるべのとしぞがたりしれれいのこ
となれば、なしなべて、おもしくしうなどいひ
ひろげざれ、いとうづしげなめる心だに、はさて
をさまへしんりしとをしたりしなくに、れたくも
いとおしろもおぼゆるなど、又もてしなれていやま
じとおもひしらくつまにもなりぬべき、今は猿の
すぐろなるこちしてかくり給ひもこれやうぎり
のなどの給しをなどかきしもやさとうちこのこ
てまたこなしぞなりにけん、秋やはうたれるおまるこの
日かずもへぶてぬ程におりしにけんかたもしれ

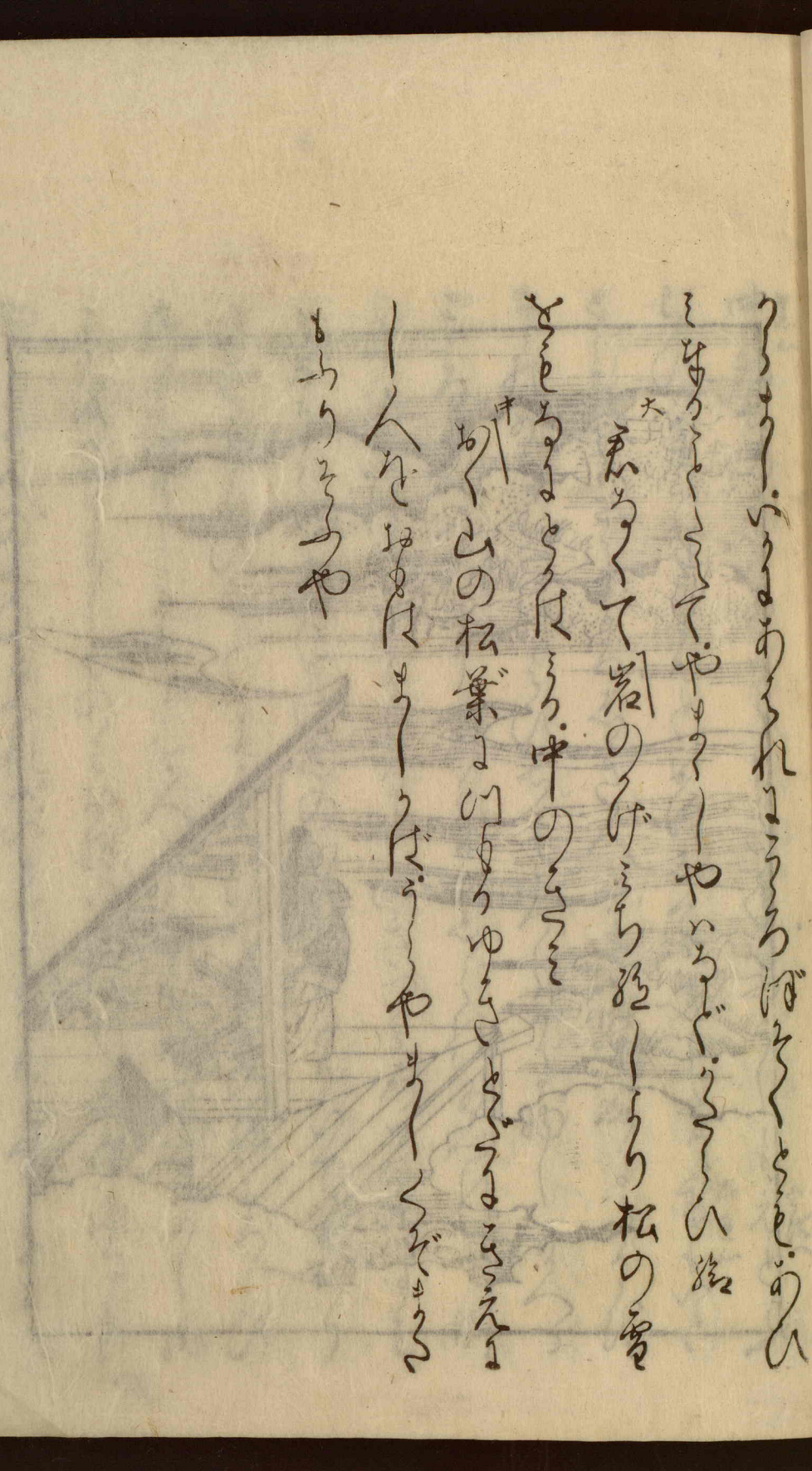
あへるまきはぐるりやうとは例の人めいろは志のら
ひるく、いとことそうぎ給めりしかど、いとまれさま
げまかきたしひ、おろりおかしくまてないたまへり
しれすまねも、犬徳(とこ)たちいでいり、ふるかるる
引へぶて、川ぶれまんすれぐどもるどぞかたしき
さ海なれど、佛はれかれ寺まう川しまりてんと
すとさしゆるをさく給はもかろ様の人(僧庭ノ事)かげなど
さへたしたてんほど、(姫宛)せまりて出給たん心ちどもを、
ひとまたし給もいとむまいたうおぼしつゞけらる
いたく(芸ノ伝ノ人)書侍りぬとゆきげ、(芸)おぼしてたち給ま
りなまてはたる

蓋 雉ぎりのまれぬ雲ぬまいとゞしくこれ世後
りといひしすん兵 白 地又 のこやまこいめん志給
とさは、まづ此表ぎりのれこと後あつりひぐさま
し給、今 白ん はさりともこころやすきをとおぼして家 白
とほんごろは罪れ給りたりるきれりてもきこと
まくつりましきるは女 姫宮庭 がこはおぼいたり、 白ノ よりり
いといたうすきおくるれ名のひろごりてこれまし
くえんはおぼさりべりめるもりう 姫宮庭ん いとうづまれたり
まぐらのしるよりさしいでたんて 久ノ事 つきも
いりまうぬくしくふりめきたんちまぐ、おもひ
くつしおくりさてもあさましうて、明くしきるに

月日なりなりがくこのこがこなりけるれ八分よ成唯日
今日とはむまでさぐ御ほうさぐめるさきたるさ
ぐらし成明くれのことまさくしかど、われも人も
をくれさきぶ川ほどしもやいへんなどうちむけるよ。
きしかるをむ川ぐらるも、何のこれもしげるる世にも
あらざりそれどこぐい川とちくのどかなるすが先
まぐし拙なそろしくつましきこともなくてへ
つるもれを風の音もあらしかよれいこぬ人がもうち
つれこそづくれば先むまつぶれてもれなそろしく
ゆびしうなばゆうことさへそひまるがいこじう
さへがてきことし二所うちかたしひ川ほとにも

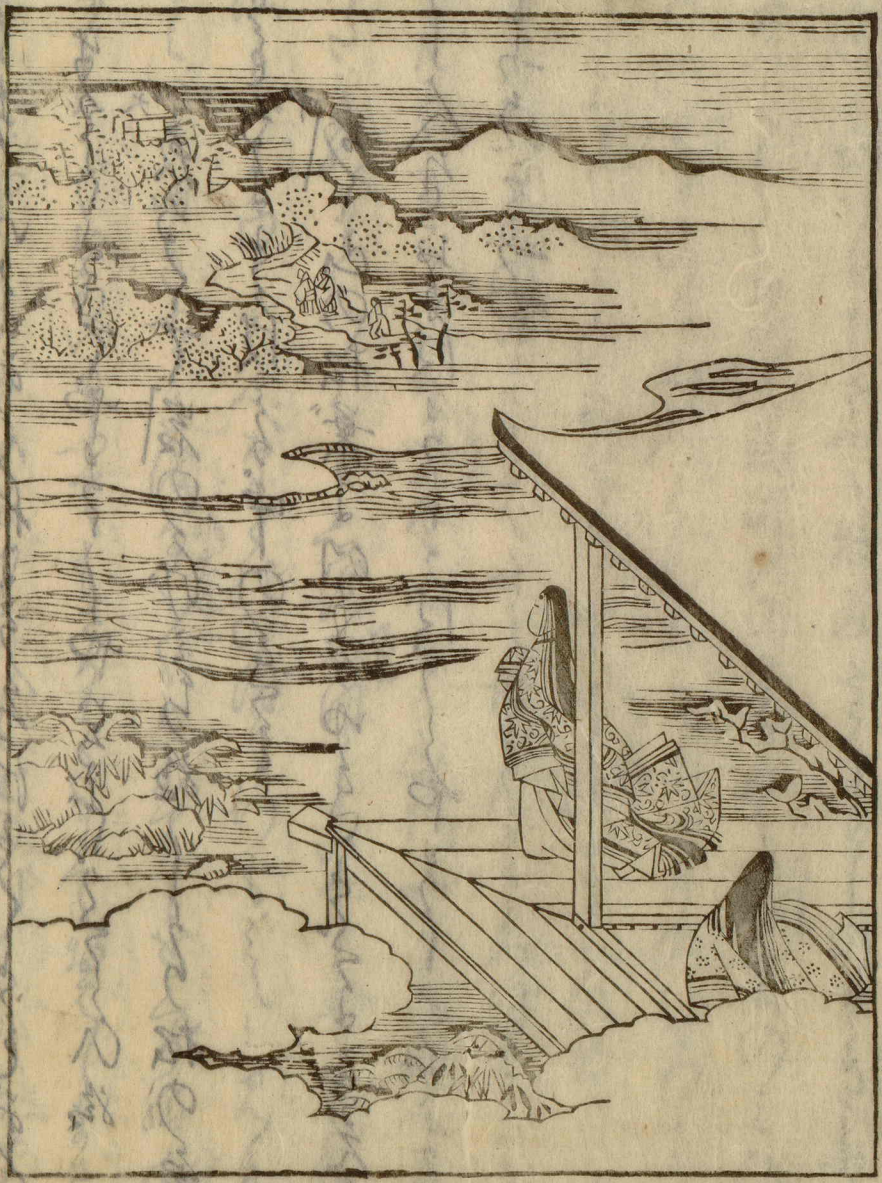
なくてゐし給ふ。さしもふれにそり雪霰（ゆきあれ）ふりしく
比もいけらもかくこそもある風の音なれど今ひじ
めてしいりたん山径の心ちし給。女（宇治ノ）ひらなぐ哀
さしいかもりなんとす。ころぼそくかるしきことに給
あしたまるべき書待出しぞと心をけたずいふも。
ありがたきことかれとさ（姫宮ノ）給。むかひの山にも。時ぐの
此会佛にてまり給しゆへこそ。ひとも来りかひ
しが。何ざりもいかゞと。大かたにまれにをとづれ
こそなれどいまはなにしにかはのめさまいらん。
いとゞひとめれたしたりるも。さるべきことにしか
がらいとかるしくなん。何ともこそざりしやま

ゞ川もおりしまきで後むさうまさしのぞきこゝあり
こゝめづらしくおぼし給ひ此のことゝて彰(たきで)木のこひ
ろひてまいる山べどもあり。あざりのむろとり。
すこなどやうの物なりとて。さし(あざり)汁にはよるしひ給ひる
けり宮づかへのいまとてさし給ふんがうろぼそきこ
なんとさうしたり。必(かなず)冬ごもり山風ふきざ川べき
ひさきあなどつくしたる(姫宮)おぼしいでゝやゝ給ひ
法しげしひとくべなどれのぼり行もこしこゝ見えん
ずこいとゆきふるき氏なくく(姫宮達ん)立出てこをとり給ひ
ゞしなどおろいおゝてもさうなとておもしまき
ましかばかやうにかよひまいる人もをのげりしたけ



ましりばかやうくよりよひまいりんもをのへりしも

うちましいかまあられまうろぼそくともおひ
こなりことくてやまくしやいなどかくしひ給
大 君なくて岩のけしうち給しより松の雪
をもなまとりはうち中のきこ
中 おく山の松葉に川もりゆきとぐるをきえ
し人をおもはましりばうしやましくぞきる
もふりそふや



中納言の君はあるしき手はあるしもえとふ
らひきこしぞらんとおぼしておりしたり雪もいと
ところをきまよろしき人ざまこそ如ましたる後
なれめるしぬけしひしてかろらかる抱しかへる
そろぞ人のあさうはあらずしたしれかへれど例
ありはいはれておましなどひきつくろはせ給すこ
ぞめるしぬれ出をけ抱のかくなりたりいでくちり
うさしらひなどするまつけても八宮の絵よろしび
給しれそしきたまどと人ごも寄ていづ大いめし給
こと後がつくましくのこおぼいれど思ぐ海なるさ
やうな人のさひかへれば、いかゞもきんとてきこそ

緒ふらくさはちかけ道ど、ささぐらのすかし
云の業でなくて、地ちがくの絲くる夜ひとめやすく
うろうづしげるらやうそのきつえずくし 上ん
もうまじとせちら緒しすぐ、とうらつけるうころうれ、
れうらめべきよあうなうくせひぬめへり、家乃 上詞 白ノ
いとあやなくも根緒この作うれ、哀ならし八 うこ
一こはうけ海ろうとさ海ろずことのつらでよ 上ノ白へ
まやまし甲そうけん、又いと海ちうされ心のさが
まて、どしらう緒まや仍らん、家まちるんとまうくれ 白ノ 上と白ノ数ヌ詰を之こ
ひさしさせるすべきとられひとつれちうされそし 中ノ
さるるハ、まてそこちるひ甲ゆりずと、夜こあんで緒 上ノ さびく 白ノ

へど心から和かちかくこひをよめれど、寔のなるべ
いひすてるなるかもえあしびの花め咲、何はいど
さしもなてらし花も路ん、ずいのくるやうるんハ
しらてあすべくあれど心のそこあやふうかうう
おもしすり文なりちる体さうごとなどの路つくりの心
ぐろうてなびきやするかなどめぐりうらめも
のまむ心おさし路るやとなんとてまでもなう、行くず
まうしあるまさらぐひて心なきようくもちくおど
けるんへそてぶせのまてちるまさらぐひてど
あるもうるもなれめまこなし、すまし心まさぐふ
つあるうもいりぐいきん、さるべこぞるぐもせひ

なすべかめれば中ところなどきこめしまそなや
やうもありくづれそめてハこゝろの海のまごなる
なれもけがしいふかひなく名ばなきやうなること
なども。これうちまじなめれ心(句ノ名)のかくしたまへかめ
めれ心ざ海まかるひことまそ置くことおほく
なども。あれし給ハざらんをば。さらまかろぐしく。
ちじめをりたぶやうなることなど。こせかふ
まじきやうしきまるん。人のこゝろしたしめことをいと
ようこゝろしたる後。もしまつりしく。さもやと(大ノ)
おぼしらんばそのまてなしなどハ心(黒ノ)の限(かぎり)つゝして
つゝうまつりなんりし。此中(黒ノ中こちと云へ)こちの御ぐこぐり

あ(呈)しそいてくらめと。いとまめやかまていひつ
けのまへは。ワ(大ん)がれこげうのことくしおぼしもかけ
ぞ。ひとれおやめきていふんりしとおぼし
めぐらしたまへど。る紙いふべきことのしもるまさ
心ちして。いかまとかしかけくしげまの給ひ
くるま。中ときこえんことも覚て行くでとうち
ひしのへるも。おひしかるまもれかしけしひおか
しうしきしも。必(意)れこづくしきこしめしおふべきこ
とともしひのへず。それは雪をふまかて。家りきこう
ころざしがりをれらんじつむ。れこれかしごろ
までもすぐさせまてよりしかれ(自ノ)れころまをはまる

ことはぞたゝべかめる。はのうまの給さ夜もたゝべめるも
しをいさやそれも人のつき字しがたきことなり。
此色ちどはいづるまかはきてし給ととひ申給ま。
大ム
ようぞこそなれまもきてしざりける。何となれ
どかうの給まもいかまちづしうむねつぶれまし
とせふまえこゝへや申給ちず
大
雪ふりき山のけちし君ちまで又ふまかふ
詠をこぬ心とかきてさし出ぬれば。蓋詞
ぬれあら
がひこそ。中ところをかれ詠りぬべかれとて
蓋
けらくとぢこ夜ふまきて山河をしるべしが
てらまづやつたんざらばしもかげさへこゆう

しるしもあきうハ侍らじとこそしぬへだ。おも（大ム）
ふずる物しうなりて。ことよいふへ給ふず。けぎや
うよいと物ど浅くすゑふるさ海まはえし給ふるぞ。
いまやうのワ人さちのやうよ。えんげまもまて
なさでいとめやすくのどうなる心だ人なるんとぞ。
としたられ給人のれけちひなる。うう（慧ム）こそハあら
まほしかれとおもふよ。さがちぬ心ちし給。ことよ
かれて気色だらこよるも。しらずがなるさ海まのゑ
もてなしぬへだ。心（慧）ちづしうて。芳物鏡などぞ
もれまめやうよ罪人給。くれたてなば。ゆきいとぐ見
もとぢぬべう侍らと。れともの人ぞこちびくれば。

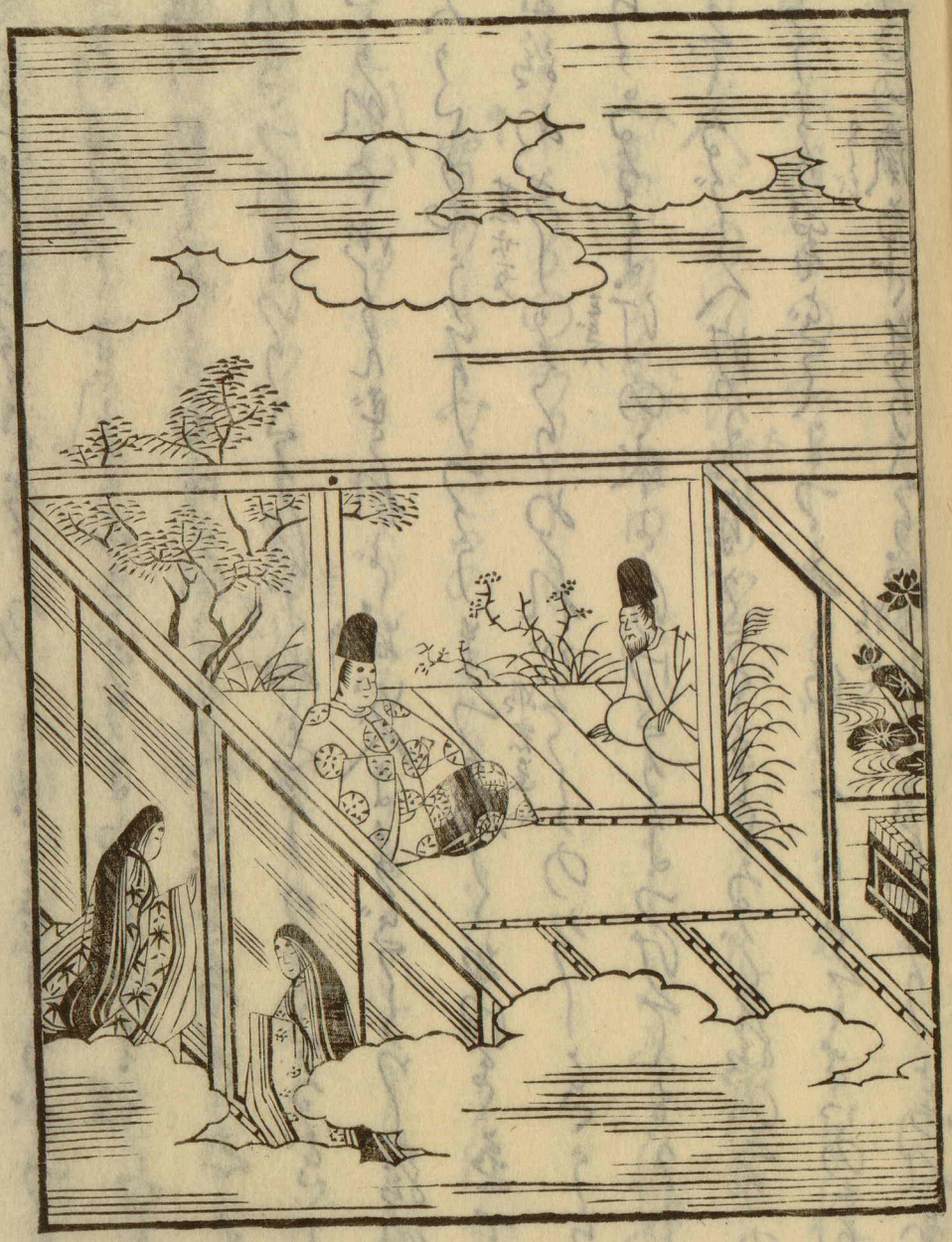
葉
かつり給なんとて心ぐるしうながめくらさるくれす
まねのさ夜ちりや。さぐ山里（葉ノ宗ノ住居と云へ）のやうにいとしづか
なる所の人もゆきまじらぬ所に侍るを。さも（大ノ）おぼし
けばいかにうれしく侍らんなどの給もいとめでこ
るべきことかれとうこゝにきてうち忍む女
びらのある後なるれ君をいとしぐるしういかり
さやうにはなべきぞとこゝさねぬるれくぞ申れ
よしあるさ夜にてまいりれともの人ぞにもさられ
などめやすき程にてかはらけさし出させ給ひ。
これれうつりがもてさはがれし無ねべぞ。かげら
ひけさらいふつらつき心づきなくてあるぞられ乃

ぬされもし人やどミかすてめし出てうりばいりまぞ
おりしまゝぞ後心ぼそりんるぎきひ路々打のそミ
つゞらのそげまるく世中まされむしうんべを
待しめ男まて六さころのれりげまりくれて大よ
もんさるし待らまされバうすはましても出よ
まじつも待しんもいりるう手の中さりいされむべく
待しんとやてうとじんへりろげるりおりしまし
くさあけさせあへれバちりりてう内まりて泪さけ
のみぞだれのうぎりおさろへずさてあひ路ならや
ミゆうれゆくあずしさりやうそてりさそうひさら泪い
ぎもさげじとちうぶうてさてしもしさひ出て

荳 くちよしんかげとされこし 椎が木むろし

さ屋(とこ)にちりはけりかれどてとしらはよろまぬ

ゆくるをもづらさんぐいのぞきてめでなう



日當ぬれば、ちりきとしろぐに、こきうるどつう
まいる人ごに、こまくきとりにやつけり、蕉きみも
きり給ちぬに、ゐ中びろ人ご、おどろく志く
ひきつれまいりたる後、蕉ん あやしうりしたるきに
ざかれと此しんぜれど、弁 おいべにまぎらりし給川、
大かたかやうりつうまつるべくおほを垂て
出給ぬ、蕉廿七 どしかたりぬれば、姫宗達ん そしらのかしきうら
らかなるに、汁(しぎハ)の氷とけいたるにつけても、かう
までながしへけるも、有がたくもとながめ給ひぞりの
ぞうより、雪どしにつゝて作るなりとて、さいのきり、
こゝの蕨(ほうび)などまりたり、いもゐ(糕進之)の此蘆(ざい)りと来れ家、

所よつけてハがらり草木のかしきよしさがひて
引ふ月日のしるしもしゆりこそおりしかれ
など人ごのいふ浪何(大)のおりしきなるんと字給
大 君がおり蓍(えは)のけしびとしましかばしられや
せましよりのしるしも
中 雪ふりさみぎいのこぎり誰とあるつゝかはや
ざんおやなるしましてなどとりなるさことをうらかる
らひつゝあけらし給中納言(葉)殿よりも安(白)よりも
おりすぐさずとふしひ字々給(地)うさくなるとなるさ
ことおほかるやうなれバれいのりきまらしたる
なるあり芸(たなざらり)盤の比安(白)がぎしをあばし出てきありし

習給しあはれともおもひて申人ありしハこの哥
住御代までもかずありましとちぎおぼくこの
あはれをたらくたにしゆるがやゆりしおぼされけり
白川てまうし宿の桜をこれ見ハ露へだてゝ折
てかざし見ばと心をやりてその給へりかり中納言おもしき
ことよれ給ちずしかくつれくちるほどよいこと
あはれたゞこのかりくありをもてけらしとて
いづくさす舟で中ろん雲深く霞にとめらる
宿の桜をあはれなくさしをるちてつれなき気色の
ことゆれバ白川よそうしとおぼしつゝれ心に
あまりあてハさらず中納言もとゞまりけむかよをおぼえ

恨(うらみ)きこしめへばなかし(昔ん)とおひあがしいとうけがり
ころうしろこがれまうちいへきこして(汨)おぐめい
ころれころぐ海をもこあらせす時ぐもいつでかか
りんまもるぐ中めへば(白)変もれころづひし給
べし心(汨)まかるふあらりをまぐこうけぬほどぐやと
の給大(タ)い後の六の君は(白ノ)おぼしいれぬとお海うら
めしげにおとぐもおぼしこりかりされ(白ん)どゆしげ
なきおらひるうちまもおとぐのことくおく
けづこしくておまぐれまぐれをもことがめ
られむが(ガ)世つりしきとおこまいのなて(ナ)まねる給
そ(その)年(とし)三条(ぐう)の変やなて(ハ)乃(女三)変も六条院ようひろ

ひまひ何(旬)くれとまれさはがしきまゝまぎれて宗治(うち)
のつゝりを久しう書づれ望てまゐず(蓋ん)まゐめやかたすか
人のれうろはまゝいとことなりかれがいとのぞうま
をれが拘というちこのこゝろがし。其の心ゆるび給ひ
ざらん限はおぎれぞこ情(なさけ)なきさ風まこしじと
ちひつゝ昔(むし)のれうろはまれぬるをふくこしまを
ぬへとおぼしてそのせしつねよりもあつき紙人はぶ
なまかはづゝすぐしかんかやと思出てまいりま
まうでまゐり給すぐこれはどま出まひかれがおや
にくまさしくる日かげまばゆくて宴(八)のかたせし
西のひさしまゝ夜ねぐめし出ておりすそなるこの

もやの佛のはまへに表ぶち抱し給ける後、けぢか
うしとて、我はかるはけたり給はけるひしのび
されど、をのづからうちうじろき給程ちらくさえて
かれば（蓋ハ）ゐる後あらしじに、ころるにかよふさうしじの
もしのるに、かけがゐ志るる所に、あるれすうしあさ
るる後、ミをさきまへりかれば、とにさてさる屏風を
引やつまてこ給、こゝもとにますをそへさてさるお
なにあしとしひてひきかへるありしも風のすぐれ
をいたう喰あぐべかめれば、あしいまもこそあれ、その
はますをし出てこそといふ人あまり、おこがまし
きもあれうれしうて、こ給へばこうきもこゝにかきも

末松をふくまれすまをしよきて、これさうじる
むりひて、おきたるさうじより、おるるまことをたん
とあるかり、先(中)ひさり立出て、事よりさしのぞき
て、此れともの人ぐの、さうり、めちがひすぐミあへる後
ミ給ちりかり、ゑきまび色のひとへ、くれざうの
ゑ後のもてさやしたる、中ニさ後かりて、茶やか
ちりとミゆるハ、きるしぬへる人がらあり、おび
ちかるげるしるして、ずぐひさかく志て、も給へり
ゆくそびやかま、猪科(やうどん)おりしげるる人のかこうち
きますらしたるぬ程なるんとこえて、末までちり
のまよひなく、つやくとこちたうう、いらしげるう

かたちしめなどあからうたげとえて。匂ひやうま
やりうるおほどきたるけれひ。(冷ノ)無一変もかうざ海
まぞおもすべきと。ほのゝなりしも出くらべられて。
うちなげうる。(大)まるゝねざり出て。(ゆれ)波さうじいおしは
まもあれとゝをとせぬへり。(よう)可(い)きうちとけたるぬ
き海志て。よしあしんとおぼゆ。うしらつきかん
ざしの程。いますすしあてまる海めしき程なり。
(内ノ人物)あるゝは屋内もそへてたてく侍り川。いそぎ
てしものぞき給ちじと。ひかきへぞ何心なくいふ
ありいたじうもあるべきひざかれとてうしろめた
げるねざりいり給ほど。けたうう心はくきけれひ

そひてこゝ。ぐろきあんを一かさね。おるじやうなる
女あひをきゝぬれど。これはなつしうる海めきて。
衰げる心ぐるしうおぼゆ。かみさびゝかなる程に
おちゝろなるべし。束すゝしほそりて。いろなり
とかいふめる。ひすいぐちていとおかしげる。いと紙
よりかけゝろやうなり。むらさきのうへにかきゝる
理をかゝてにもちゐるてつき。かれ(中よりこ)よりも(大)ほそ
き海さりて。やをくなるべし。こちゝりつる(中)きこゝを。
さうじぐちにゐて。何(なにごと)夏にかあらん。こゝるこを
こをこきてけらひゝる。いとあひぎやうつきゝり

69038
6 AP 78